

清月

7月中の出句 17名 延べ668句



第168号 平成26年 7月

天神祭（天満祭・船祭）について

ゆたか

各地に天満宮があり天神様が祭られているが、俳句で単に「天神祭・天満祭・船祭」と詠むと大阪の天満宮の夏祭をさす。

天神祭は、毎年七月二四日の宵宮と翌二五日の本宮の二日間、近くの大川一帯で催され、花火や篝火が川面に映えることから「火と水の祭礼」とも呼ばれている。

この祭は、平安時代に始まったといわれ千年以上の歴史を誇っている。

祭は、二四日朝、神職や神童が大川下流の堂島川に漕ぎ出した船の上から神鉾を流す「鉾流神事」で開幕する。

翌二五日の本宮は、天満宮を出発した神輿が天神橋の乗船場まで練り歩く「陸渡御」が行われ、その後、百隻余の船が航行する「船渡御」が始まる。

御神霊を乗せた御鳳輦奉安船・鉦や太鼓で祭りを盛り上げるどんどこ船・企業や団体などが出す奉拝船などが水上を行き交う。

奉拝船では関係者やその客が船上で趣向を凝らした催しや飲食を楽しみ、すれ違う船・川岸や橋上の見物客らと「①打ちましょっ（パンパン）②もひとつせ（パンパン）③祝うて三度（パンパン）④おめでとうございます（拍手）」の大阪締めを打ち交わしながら航行する。

その夜は、天神様にちなんで梅鉢の形に開く紅梅という花火など奉納花火が約四千発打ち上げられ空と川面を彩る。

以上

目次

近詠	ゆたか	2
雑詠選	ゆたか	3
寸感	ゆたか	9
互選集計結果報告	事務局	10
互選一〇句の披講	幹夫 よし子 睦夫 しゆじ 恵山 宏一 伸義 省司 允孝 美琴	
	順一	

近詠

野田ゆたか

ヒーローの言葉涼しきお立台
闘ひの姿勢漲る兜虫
夕立に囚はれしごと軒に佇つ
雨意の風募り峰雲はゆ崩る
遙かなる記憶を語り星涼し

雑詠

(太字は秀句)

ゆたか選

海の日や満艦飾の大湊 岡山 橋本幹夫
 ささくれし指を潤す苔清水 同
 争乱は何時も何処かで雲の峰 同
 一刻を月下美人と酌みかはす 同
 山笠や博多目出度き祝唄 同
 水貝の一つ一つに磯香る 千葉 清水恵山
 花莫塵の疲れを癒す香りかな 同
 乾杯はビールの泡の消えぬまに 同
 参道の屋台にラムネ玉の音 同
 鬣の衰へきたる馬洗ふ 同

百日紅一樹明るき診療所 吹田 池下よし子
 振花の凜と右巻きひだりまき 同
 青鯖の塩たつぷりと船場汁 同
 やうやくにヨーヨー釣るや夜店の子 同
 滴りの辺り小暗し不動堂 同
 夏帽子かぶり働き盛りかな 静岡 渡邊春生
 山鉾や夜風に物売りの声 同
 青田波道者の声のはつらつと 同
 谷川に吸い込まれゆく蟬の声 同
 入道雲老いてなほあるこころざし 同
 遠き日の勤勞奉仕草いきれ 岐阜 石崎そうびん
 老鶯や伊賀と甲賀は谷伝ひ 同
 片陰の尽きて古町途切れけり 同

葛餅や宇陀の老舗の深庇 岐阜 石崎そうびん

山門は風の入り口 葎の花 同

憂きこともさりと流し髪洗ふ 島根 白根鈴音

やはらかき風が撫でゆく釣しのぶ 同

純白の白きを纏ひ沙羅の花 同

塩梅は妻の機嫌か胡瓜揉み 同

初蝉や胸の高さで鳴きはじむ 同

大川に手締いくども船祭 大阪 木村宏一

梅雨明や軽くなりたる朝の風 同

山の駅乗り込む蝉の合唱団 同

睡蓮の目覚めは早し朝まだき 同

辻回し山鉾揺らし軋む竹 同

仙人掌や鎌首のばし一夜花 三重 山口美琴

片陰を選んで歩む猫の道 三重 山口美琴

真ツ二つメロンの香るティータイム 同

クリスタル彩どり映す夏料理 同

束の間の日射しのありて蝉時雨 同

夏雲の沖で湧き立ちゆく高さ 三重 後藤允孝

ブラインドー気に降ろし西日断つ 同

潮焼に背中がもえて眠れぬ夜 同

しばらくは主役でいたい冷奴 同

夏深き見下ろす海は熊野灘 同

高原の早立ちの宿夏炉焚く 大阪 山縣伸義

坪庭に押し合ひながら百日草 同

かたことと路面電車の音 晩夏 同

白南風や久久なりし空の青 同

梅雨晴間竿竹売の声流れ 大阪 山縣伸義
 夏草へ反省会の腰下ろす 千葉 田村公平
 合宿のラジヲ体操明易し 同 同
 十薬を引いて無口の庭師かな 同 同
 指先に酸っぱさが飛ぶ夏ミカン 同 同
 花楓疲れた足をしばし停め 愛知 駒田暉風
 重昂の墓は舍利塔木下闇 同 同
 梅雨空へ鼻を突き出し象は老ゆ 同 同
 木登りの蟻に大きな葉が迫る 愛知 石川順一
 青田道中学生らが風となる 同 同
 背の高き向日葵交番見えて来る 同 同
 早苗伸び田の隅にまで風の波 大阪 森戸しゆじ
 風の中吊りし風鈴の響き合ふ 同 同

夏薔薇雨深まれば色冴えて 山梨 志村万香
 炎帝に心急かるる六十路かな 同 同
 今日の日の日誰にも負けぬ兜虫 東京 橋本幹史

寸感

ゆたか

海の日や満艦飾の大湊 幹夫

明治九年に明治天皇が東北行幸の帰路、初めて軍艦ではなく汽船を召された日を「海の記念日」とされていたが、平成八年より「海の日」と呼ばれるようになった。

満艦装から往事の大湊での警衛艦船や随行船を垣間見る思いがしました。

百日紅一樹明るき診療所 よし子

百日紅の花のは、盛夏に咲いている唯一の木の花であり多くの人に親しまれている。囁目を自然体で写生された伝統俳句の手のような句に仕上がっています。

景が心に美しく沁みてきます。

夏帽子かぶり働き盛りかな 春生

働く人にとって夏帽子は必需品。

働き盛りから汗のにじんだ帽子を連想し、働く作者の生活の良さが見えてきました。

常套句の感があるが、「働き盛り」がよく効いて非凡の句になっています。

遠き日の勤勞奉仕草いきれ そうびん

町内・社寺・皇居などの草刈りや草取りの勤勞奉仕の景が目につかびました。

草いきれから若き日の勤勞奉仕のことが端的に表現されています。

遠き日が俳趣として伝わってきます。

憂きこともさらりと流し髪洗ふ 鈴音

冷房など生活環境の進歩した今日においても、汗ばんだ髪を洗うことは心地よい。

髪を洗って気の進まない嫌なことなどは忘れることにして涼感を得ようという作者。

作者の日常生活のありようが俳趣として伝わってきました。

大川に手締いくども船祭 宏一

天神祭の一景。嘩しながら航行する多くの船が川を上り折り返してくる。

行き交う船が互いに行う大阪締の景が見事に写生されています。

(大阪締は巻頭をご参照ください。)

互選一〇句の集計結果 互選者十一人

高点句

四点 夏座敷一筆箋の墨香る

清水恵山

同 夏草を刈られ鎮座の道祖神

筒井省司

同 高原の早立ちの宿夏炉焚く

山縣伸義

同 憂きこともさらりと流し髪洗ふ

白根鈴音

高点者

一三点 石崎そうびん

一〇点 清水恵山

九点 池下よし子

同 山口美琴

互選一〇句 橋本幹夫選

人間といふ虫になる蚊帳の中 白根鈴音
風遊ぶ丹波城下の軒風鈴 池下よし子
石穿ち命の水の滴りて 瀬尾睦夫
風の中吊りし風鈴の響き合ふ 森戸しゆじ
夏帽子かぶり働き盛りかな 渡邊春生
夏座敷一筆箋の墨香る 清水恵山
葛餅や宇陀の老舗の深庇 石崎そうびん
凌霄花夕日に解けて散りゆけり 山口美琴
潮焼に背中がもえて眠れぬ夜 後藤允孝
白玉やそぞろ歩きの京の街 木村宏一
互選一〇句 池下よし子選
大川に手締いくども船祭 木村宏一
老鶯や伊賀と甲賀は谷伝ひ 石崎そうびん
海の日や満艦飾の大湊 橋本幹夫
夏薔薇雨深まれば色冴えて 志村万香
仙人掌や鎌首のばし一夜花 山口美琴
水貝の一つ一つに磯香る 清水恵山
高原の早立ちの宿夏炉焚く 山縣伸義
石穿ち命の水の滴りて 瀬尾睦夫
憂きこともさらりと流し髪洗ふ 白根鈴音
潮焼けに背中がもえて眠れぬ夜 後藤允孝

互選一〇句 清水恵山選

老鶯や伊賀と甲賀は谷伝ひ そうびん
梅雨明や軽くなりたる朝の風 木村宏一
毛虫這ふやがて綺麗に舞ふまでは 橋本幹夫
噴水や大正ロマン街なごり 池下よし子
片陰を選んで歩む猫の道 山口美琴
空蟬や精一杯に抜けあたり 後藤允孝
リハビリの妻を送りし大暑かな 筒井省司
夕風や蚊遣りの煙身にまとひ 瀬尾睦夫
蟬しぐれ母の咎めか耳を打つ 鈴音
夏草へ反省会の腰下す 田村公平
互選一〇句 木村宏一選
風の中吊りし風鈴の響き合ふ 森戸しゆじ
遠き日の勤勞奉仕草いきれ 石崎そうびん
争乱は何時何処かで雲の峰 橋本幹夫
花火師のなにはを焦す大舞台 池下よし子
凌霄花夕日に解けて散りゆけり 山口美琴
夏座敷一筆箋の墨香る 清水恵山
夏草を刈られ鎮座の道祖神 筒井省司
高原の早立ちの宿夏炉焚く 山縣伸義
憂きこともさらりと流し髪洗ふ 白根鈴音
掛軸の模様替へして梅雨明くる 瀬尾睦夫

互選一〇句 瀬尾睦夫選

炎帝の地軸が少し動くとき 橋本幹夫
手火花やいつまで揺るる火のしづく 池下よし子
羅を脱げば読経の僧若し 清水恵山
梅雨明けや軽くなりたる朝の風 木村宏一
束の間の日射しもらひて蟬時雨 山口美琴
菜園といふも一坪茄子の花 そうびん
黄昏て海の濃淡暑氣払ひ 後藤 允孝
ひっそりと雨の宿りの夏菫 万香
しがみ付く葉に空蟬の風吹かれ 石川順一
星はじく線香火花懐かしき 筒井省司
互選一〇句 森戸しゆじ選
山の駅乗り込む蟬の合唱団 木村宏一
片陰の尽きて古町途切れけり 石崎そうびん
木登りの蟻に大きな葉が迫る 石川順一
青鯖の塩たつぷりと船場汁 池下よし子
仙人掌や鎌首のばし一夜花 山口美琴
夏草を刈られ鎮座の道祖神 筒井省司
十薬を引いて無口の庭師かな 田村公平
高原の早立ちの宿夏炉焚く 山縣伸義
今日の日の誰にも負けぬ兜虫 橋本幹史
憂きこともさらりと流し髪洗ふ 白根鈴音

互選一〇句 山縣伸義選

葛餅や宇陀の老舗の深庇 そうびん
酒弱き父でありしよ冷奴 そうびん
菜園といふも一坪茄子の花 そうびん
頑なに生き通すこと盂蘭盆会 森戸しゆじ
盆近しこの世に居たしもう少し 森戸しゆじ
朱に染めし海の絨毯大西日 田村公平
初蟬や杜の階段登り来て 筒井省司
冷え麦茶どつしりやかん座りをり 木村宏一
瓜番の夜明け眠たくなりにけり 橋本幹夫
涼しさや漁火並ぶ水平線 清水恵山
互選一〇句 筒井省司選
片陰の尽きて古町途切れけり 石崎そうびん
十薬を引いて無口の庭師かな 田村公平
ブラインド一氣に降ろし西日絶つ 後藤充孝
冷酒に亭主自慢の切子かな 瀬尾睦夫
蟬時雨無賃乗車や山の駅 山口美琴
駅前シャッター通り夜店立つ 清水恵山
菜園といふも一坪茄子の花 石崎そうびん
登り来て天守仰ぐや夏帽子 池下よし子
山の駅乗り込む蟬の合唱団 木村宏一
風鈴に窓を小さく開けにけり 山縣伸義

互選一〇句

後藤允孝選

花楓疲れた足をしばし停め 駒田暉風
 遠き日の勤勞奉仕草いきれ 石崎そうびん
 晩夏光風に任せて權を漕ぐ 橋本幹夫
 炎帝に心急かるる六十路かな 志村万香
 振花の凜と右巻きひだりまき 池下よし子
 胡瓜もみ手に香残して夕餉なり 山口美琴
 夏座敷一筆箋の墨香る 清水恵山
 水貝の一つ一つに磯香る 清水恵山
 夏草を刈られ鎮座の道祖神 筒井省司
 能面を外して汗の太郎冠者 瀬尾睦夫

互選一〇句 山口美琴選

梅雨明や軽くなりたる朝の風 木村宏一
 遠き日の勤勞奉仕草いきれ 石崎そうびん
 夏薔薇雨深まれば色冴えて 志村万香
 百日紅一樹明るき診療所 池下よし子
 夏座敷一筆箋の墨香る 清水恵山
 争乱は何時も何処かで雲の峰 橋本幹夫
 夏草を刈られ鎮座の道祖神 筒井省司
 ブラインド一氣に降ろし西日断つ 後藤允孝
 高原の早立ちの宿夏炉焚く 山縣伸義
 憂きこともさらりと流し髪洗ふ 白根鈴音

互選一〇句

石川順一選

ジッポーに油を注ぎ毛虫焼く 橋本幹夫
 親方の鋏が暴く木下闇 田村公平
 訛りなど直す氣は無し鱧を食ふ 田村公平
 葛餅や大正琴の流れくる 清水恵山
 「作者による訂正」
 葛餅や大正演歌の流れくる
 一日を三で割られて昼寢覚 鈴音
 冥加ある説法聞いて蚊に刺さる 後藤允孝
 片蔭を選んで歩む猫の道 山口美琴
 ブラインド一氣に下ろし西日断つ 後藤允孝
 八戸の便り揺るるやイカ風鈴 池下よし子
 公園に隠密集う草刈り日 筒井省司

インターネット俳句 清月
 第168号
 平成26年7月中の出句から

発行
 平成26年 8月20日

主宰 兼 編集
 野田ゆたか

発行所
 枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ
<https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm>